

## 2014 年度 日本精神分析的な心理療法フォーラム 第 3 回大会

主催 : 日本精神分析的な心理療法フォーラム

後援 : 甲南大学人間科学研究所 ・ 京都文教大学心理臨床センター  
KIPP 桃山心理オフィス ・ NPO 法人こどもの心理療法支援会  
北大阪こころのスペース

### ご挨拶

おかげをもちまして、学会化後第三回目の「日本精神分析的な心理療法フォーラム」を開催する運びとなりました。このフォーラムは、精神分析的な心理療法に関する自由で開かれた議論を行う場として設立されました。とかく精神分析というと、堅苦しく窮屈なイメージで捉えられやすい面がありますが、身近な臨床実践の場で生かすためには、荒削りではあってもその可能性を広げる伸びやかな発想が大切ではないかと思ひます。

会としては、学会の形を取るようになりましたが、設立当初の理念をより一層追求することができればと願っております。開催のためにご尽力いただいた多くの方々に感謝いたしますとともに、今後の発展に向けてより一層のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

日本精神分析的な心理療法フォーラム  
第 3 回大会長 山本 昌輝

#### ＜日本精神分析的な心理療法フォーラム 理事＞(50 音順・敬称略)

石谷真一、今江秀和、葛西真記子、金沢 晃、川畑直人、崔 炯仁、飛谷 渉、  
平井正三、広瀬 隆、藤原雪絵、宮田智基、森 茂起、山下達久、山本昌輝

## プログラム

2014年12月6日(土)

	9:00	10:00	12:30	13:30	16:00	16:30	19:00	19:30	20:30
受付 敬学館 2F	ワークショップ1 262号室	総会 250 号室	ワークショップ2 262号室	休憩	大会企画 シンポジウム1 敬学館250号室 (途中15分休憩)	休憩	懇親会 以学館 地下 食堂		
	分科会1 263号室		分科会2 263号室						
	個人発表1 264号室		分科会3 264号室						

2014年12月7日(日)

	9:00	10:00	12:30	13:30	16:30
受付 敬学館 2F	ワークショップ 262号室	休 憩	大会企画 シンポジウム2 敬学館250号室 (途中15分休憩)		
	分科会4 263号室				
	個人発表2 264号室				

◆懇親会では軽食と飲み物を用意いたします。  
参加無料、自由参加となっておりますので、是非ご参加ください。

※2015年度の第4回大会より大会開催時期が6月となります。  
次回大会は2015年6月13-14日(土-日)に甲南大学岡本キャンパスにて行う予定です。

## アクセスマップ

立命館大学 衣笠キャンパス 〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1



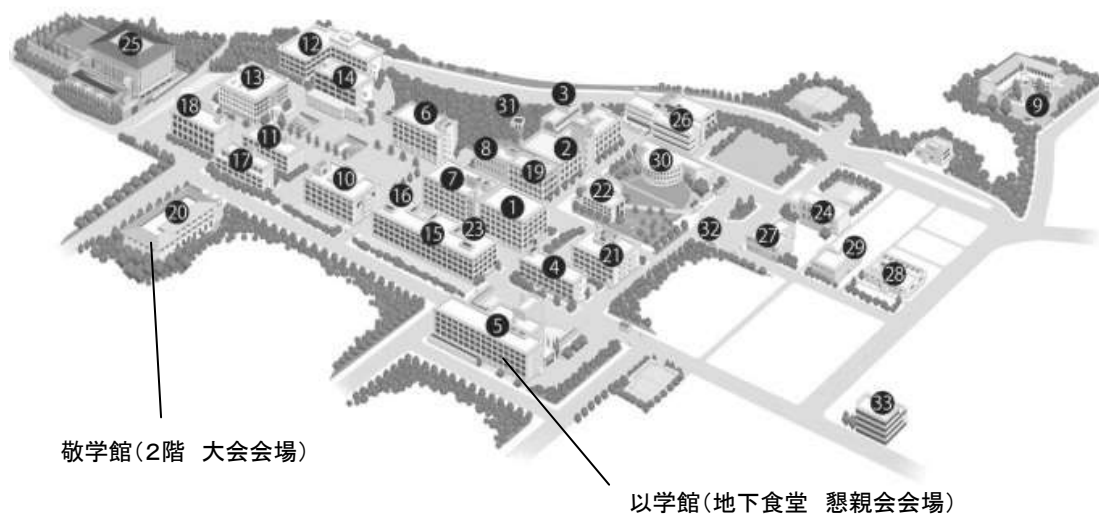
## アクセス方法

JR・近鉄 京都駅 (烏丸中央口)	京都市バス 京都駅前	市バス <b>50</b> (京都駅B2のりば) <sup>※</sup> <b>快速205</b> (京都駅B3のりば)	立命館大学前(終点)	約35分
		市バス <b>205</b> (京都駅B3のりば)	衣笠校前	徒歩 約10分
JRバス 京都駅	JRバス	JRバス 高雄・京北線 (京都駅JR3番のりば)	立命館大学前	約30分
		市バス <b>205</b>	衣笠校前	徒歩 約10分
阪急 西院駅	京都市バス 西大路四條	市バス <b>快速202</b> <sup>※</sup> <b>快速205</b> <sup>※</sup>	立命館大学前(終点)	約20分
		市バス <b>26</b>	等持院道	徒歩 約10分
	西院福	京福電鉄 嵐山本線・北野線	龍安寺駅	徒歩 約25分
阪急 大宮駅	京都市バス 四條大宮	市バス <b>55</b>	立命館大学前(終点)	約20分
	京阪 三条駅	京都市バス 三條京阪前	市バス <b>15</b>	立命館大学前(終点)
		市バス <b>59</b>	立命館大学前	約30分
JR・地下鉄 二条駅	京都市バス 二条駅前	市バス <b>15</b> <b>55</b>	立命館大学前(終点)	約15分
JR 円町駅	京都市バス 西ノ京円町	市バス <b>15</b> <sup>※</sup> <b>快速202</b> <sup>※</sup> <b>快速205</b> <sup>※</sup>	立命館大学前(終点)	約10分
		市バス <b>204</b> <b>205</b>	衣笠校前	徒歩 約10分

立命館大学 衣笠キャンパス

※土日・運休

## 校内図



12月6日(土)

◆10:00～12:30

ワークショップ1(敬学館 262 号室)

「精神分析的な心理療法の枠について考える」

講師:川畑直人(京都文教大学、京都精神分析心理療法研究所)

分科会1(敬学館 263 号室)

「学生相談に生かす対人関係/関係精神分析的視点 II-『面接の構造と連携』を考える」

司会者:家次安子(兵庫医科大学保健管理センター学生相談室、KIPP 精神分析協会)

発表者:今江秀和(広島市立大学保健管理室、KIPP 精神分析協会)

発表者:伊藤未青(佛教大学学生相談センター、KIPP 精神分析協会)

発表者:野原一徳(愛知淑徳大学学生相談室、KIPP 精神分析協会)

指定討論者:鈴木健一(名古屋大学学生相談総合センター、KIPP 精神分析協会)

指定討論者:松本寿弥(京都文教大学、同志社大学カウンセリングセンター、KIPP 精神分析協会)

個人発表1(敬学館 264 号室)

「精神分析(的)な心理療法における「真実」の発見について;土居の準拠枠から」

発表者:清川雅充(柏崎厚生病院)

「メルツァー『こころの性愛状態』に見られる社会思想についての一考察

——結合対象概念によるエディプス構造概念の深化の含み」

発表者:平井正三(御池心理療法センター、NPO 法人子どもの心理療法支援会)

◆12:30～13:30

総会(敬学館 250 号室)

昼休みに総会を行います。会員の方はご出席ください。

◆13:30～16:00

ワークショップ2(敬学館 262 号室)

「自己心理学的スタンスが“ある時”と“ない時”」

講師:羽下大信(住吉心理オフィス、JFPSP 自己心理学協会)

中西和紀(あいせい紀年病院、JFPSP 自己心理学協会)

分科会2(敬学館 263 号室)

「精神分析的治療過程を考える —それぞれの治療者による捉え方—」

司会・話題提供者:吉沢伸一(ファミリーメンタルクリニックまつたに)

話題提供者:鳥越淳一(日本橋学館大学)

話題提供者:上田勝久(京都民医連中央病院太子道診療所)

話題提供者:浜内彩乃(大阪バイオメディカル専門学校)

指定討論者:北川清一郎(心理オフィス K)

分科会3(敬学館 264 号室)

「学校の危機と精神分析」

司会:堀内 毅(猿島厚生病院)

演者:植木田潤(国立大学法人 宮城教育大学)

演者:上田順一(大倉山子ども心理相談室)

演者:人見健太郎(みとカウンセリングルームどんぐり)

指定討論:飛谷 渉(大阪教育大学保健センター)

◆16:30～19:00

大会企画シンポジウム1(敬学館 250 号室)

「精神分析的な心理療法への神経科学の寄与」

司会:広瀬 隆(帝塚山大学、北大阪こころのスペース)

シンポジスト:岡野憲一郎(京都大学)、平尾和之(京都文教大学)

指定討論:川畑直人(京都精神分析心理療法研究所、KIPP 精神分析協会)

12月7日(日)

◆10:00～12:30

ワークショップ3(敬学館262号室)

「協働とコミュニケーションという視点で心理療法を見ていくこと」

講師:平井正三(御池心理療法センター、NPO法人子どもの心理療法支援会)

分科会4(敬学館263号室)

「被災地コミュニティに継続的な支援をするためのつながり形成に関する精神分析的考察」

司 会:長川歩美(A&C中之島心理オフィス)

話題提供者:辻 啓之(京都精神分析心理療法研究所)

話題提供者:野原一徳(愛知淑徳大学学生相談室)

話題提供者:今井たよか(あるく相談室京都)

指定討論者:川畑直人(京都文教大学、京都精神分析心理療法研究所)

個人発表2(敬学館264号室)

「フロイトの冥界めぐり——『夢解釈』の二重の銘をめぐる一考察——」

発表者:上尾真道(立命館大学衣笠総合研究機構)

「欲動論から対象関係論へ——アブラハムにおける躁うつ病論の展開——」

発表者:藤井あゆみ(京都大学大学院人間・環境学研究科(日本学術振興会特別研究員))

◆13:30～16:30

大会企画シンポジウム2(敬学館250号室)

「精神分析の源流をたどる—フェレンツィの貢献—」

司 会:金沢 晃(神戸市外国語大学、NPO法人子どもの心理療法支援会)

シンポジスト:奥寺 崇(クリニックおくでら)、森 茂起(甲南大学)

指 定 討 論:山本昌輝(立命館大学)、飛谷 渉(大阪教育大学保健センター)

## 抄録

### ◆大会企画シンポジウム

大会企画シンポジウム1 12月6日(土) 16:30~19:00(敬学館 250号室)

#### 「精神分析的心理療法への神経科学の寄与」

司 会: 広瀬 隆(帝塚山大学、北大阪こころのスペース)

シンポジスト: 岡野憲一郎(京都大学)、平尾和之(京都文教大学)

指 定 討 論: 川畑直人(京都精神分析心理療法研究所、KIPP 精神分析協会)

1990年代以降、イメージング技法の大いなる進歩により、脳に関する研究は飛躍的な進歩を遂げた。臨床的経験の知として理論化されてきた精神分析の潮流にとっても、神経科学との接触は避けられないものとなっている。「神経精神分析 (Neuropsychanalysis)」の台頭に見られるように、精神分析に時に見られた教条的なあり方にとどまらず、経験的知を神経科学の視点からとらえ直そうとする試みが次々となされている。脳と体と心という本来切り離せない生ける人間をクライアントとして引き受ける私たち臨床家もまた、クライアントと同じ生物学的限界の中で生きており、心-脳に関心を払うことを避けては通れないであろう。

岡野は、「個々の病気を知るために、心理士は精神医学や脳の専門家になる必要はないが、『脳科学オタク』くらいにはなっておくことは必要だろう」と述べている。(岡野(2013)) この主張は、現代の心理臨床家にとっては無視できない主張であろう。一方で、次々と進歩を遂げると同時に、まだまだ不可思議な脳の世界に対して、どのように向かうか途方に暮れることもあろう。

本企画では、まず、心理療法家にとって神経科学はどのような意味をもち、どのように関わっていくべきかという提言からはじめ、シンポジストに特に取り上げたいテーマについて論じていただく、そして今後神経科学と精神分析的な心理療法はどのように関わっていくべきかについて述べていただく。

まず、岡野氏からは、「脳を知ることで、治療的なのかかわりがどう変わるか」というテーマでお話いただく。より具体的には、フロイトに始まる決定論的・機械論的な心についての観点にかわる、「脳科学が示唆する心の非決定論的な性質」について論じていただく。

次に、平尾氏からは、神経精神分析のはじまりと展開について紹介していただき、神経科学的視点を精神分析のテーマに重ねることによって生まれてくる心理療法へのインパクトについて、論じていただく。

その後、指定討論者である川畑氏よりコメントしていただき、討議に入る。

#### 参考文献

岡野憲一郎 (2013) : 脳から見える心—臨床心理に生かす脳科学 岩崎学術出版社

Solms, M., Turnbull, O. (2002) : The Brain and the Inner World: An Introduction to the

Neuroscience of the Subjective Experience 平尾和之訳 (2007) : 脳と心的世界—主観的経験のニューロサイエンスへの招待 星和書店

大会企画シンポジウム2 12月7日(日) 13:30~16:30 (敬学館 250号室)

#### 「精神分析の源流をたどる—フェレンツィの貢献—」

司 会: 金沢 晃(神戸市外国語大学、NPO 法人子どもの心理療法支援会)

シンポジスト: 奥寺 崇(クリニックおくでら)、森 茂起(甲南大学)

指 定 討 論: 山本昌輝(立命館大学)、飛谷 渉(大阪教育大学保健センター)

2012年度第1回大会では、全体会「フロイトとその現代的意義」を開催し、精神分析の原点から現代精神分析を捉えなおした。この全体会はその流れを引き継ぎ、精神分析の誕生と発展に大きな影響を与えた分析家の貢献を改めて見つめなおし、現代精神分析を实践する我々の日々の臨床を振り返ることを目的としている。今大会は、S. フェレンツィを取り上げる。フェレンツィは、フロイトと同時代に生きた分析家で、フロイトから影響を受けたのみならず、フロイトにも多大な影響を与えた。しかしながら、フェレンツィが試みたいいくつかの実験的取り組みのために、市民権を得ようとしていた当時の精神分析コミュニティからは異端として扱われ、その他の彼の重要な貢献までも闇へと葬り去られてしまった。彼は、インディペンデントグループ (ウィニコット、フェアバーン、バリント)、対人関係学派 (サリヴァン、トンプソン)、クライン派 (クラインその人、クライン派第一世代、第二世代) に影響を与えたという点で、その貢献は多大である。彼の貢献を今一度見つめなおすことは、我々の精神分析実践を見つめなおす上でも必要不可欠である。

## ◆ワークショップ

**ワークショップ1 2014年12月6日(土) 10:00~12:30 (敬学館 262号室)**

### 「精神分析的心理療法の枠について考える」

講師:川畑直人(京都文教大学、京都精神分析心理療法研究所)

精神分析的心理療法ではしばしば枠を守ることが重視され、強調される。たとえば、場所、時間、頻度、椅子の配置、料金などの外的なセッティングは、一定不変の枠であり、それによってクライエントは守られるとか、それによって転移の分析がしやすくなるなどと、と教えられる。それによって、精神分析的心理療法を志す者は、この枠から逸脱することを恐れ、枠を守ることに精力を集中しようとする。そして、その枠が精神分析的心理療法を定義づけるものと考えられるようになる。しかし、そもそもこの枠とは何であるのか。フロイトをはじめ、寝椅子を使用する理由として、一日中患者に見つめられるのが負担であるということを挙げた。つまり、寝椅子を使用するというきまりは、患者のためというよりも、フロイトという治療者の個人的な都合から生まれたのである。

このワークショップでは、一般的に大切にされる精神分析的心理療法の枠についてとりあげ、それがどういう意味を持っているのかについて検討を加える。特に、境界 boundary、権限 authority、役割 role、目的 task (BART) という組織分析に使う概念を用いて、心理療法の枠の意味を吟味することにより、心理療法を行う目的や、心理療法が行われる場の条件にとって最適な枠とは何かを検討してみたい。精神分析的心理療法に関心のある初学者や、さまざまな現場で精神分析的な観点を生かしてみようと考えている臨床家にとって、役に立つワークショップになることを目指す。

**ワークショップ2 2014年12月6日(土) 13:30~16:00 (敬学館 262号室)**

### 「自己心理学的スタンスが“ある時”と“ない時”」

講師:羽下大信(住吉心理オフィス、JFPSP 自己心理学協会)

中西和紀(あいせい紀年病院、JFPSP 自己心理学協会)

本邦において必ずしも人口に膾炙しているとは言えない自己心理学に関する入門的な議論を提供したい。初学者や大学院生をはじめ、自己心理学になじみの薄い専門家向けに、専門的な議論に偏らずに実践的なトピックスを中心に、自己心理学臨床に関する話題を提供する予定である。一般的なトピックスとして、精神病の理解とかかわり・発達障害の理解・スクールカウンセリング場面での適用を、そして自己心理学のトピックスとして間主観的な視点と、乳幼児研究からもたらされた刺激の調整に関する視点の応用について、事例などをとおして会場と討論していきたい。

**ワークショップ3 2014年12月7日(日) 10:00~12:30 (敬学館 262号室)**

### 「協働とコミュニケーションという視点で心理療法を見ていくこと」

講師:平井正三(御池心理療法センター、NPO 法人子どもの心理療法支援会)

本ワークショップでは、まず講師が、心理療法過程を協働とコミュニケーションという視点で見ていくことについてその理論的含み、そして技法的な含みについて概説する。心理療法は、クライアントの心理学的問題を治療関係において協働して解決を目指す営みと理解できる。このような協働の視点は、精神分析的心理療法においては特に「治療同盟」の重要性として自我心理学の中で語られてきたことと重なる問題意識であり、ビオンが Work Group として概念化したこととも関わる。またこうした協働関係を構築し発展させていくためには相互のコミュニケーションの性質の吟味は必須の視点である。

本ワークショップでは以上の視点について、事例を通じてさらに理解を深めていくことを目指す。



## ◆分科会

分科会1 2014年12月6日(土) 10:00~12:30 (敬学館 263号室)

### 「学生相談に生かす対人関係/関係精神分析的視点 II -『面接の構造と連携』を考える」

司会者：家次安子(兵庫医科大学保健管理センター学生相談室、KIPP精神分析協会)

発表者：今江秀和(広島市立大学保健管理室、KIPP精神分析協会)

発表者：伊藤未青(佛教大学学生相談センター、KIPP精神分析協会)

発表者：野原一徳(愛知淑徳大学学生相談室、KIPP精神分析協会)

指定討論者：鈴木健一(名古屋大学学生相談総合センター、KIPP精神分析協会)

指定討論者：松本寿弥(京都文教大学、同志社大学カウンセリングセンター、KIPP精神分析協会)

#### ■企画趣旨

昨年に行った「学生相談に生かす対人関係/関係精神分析的視点」の第二弾として、今回は「構造と連携」というテーマで企画しました。学生相談は学生への面接を中心しつつ、心理教育的な支援、様々なアプローチ、柔軟な連携や協働が必要です。特に連携や協働は、個別面接だけでは対応困難な問題の取り組みを可能にするという意味でも、欠かすことができません。それと同時に、複数の様々な立場の人間が関わることで、本来の学生への支援を果たすのが難しくなる時もあります。精神分析的臨床実践を行っている発表者たちはこれらをどう理解し、生じる難しさをどのように取り扱い、どうその専門性を保っているのでしょうか。こうしたテーマで家次の司会のもと、今江、伊藤、野原の3人が話題提供し、鈴木、松本の指定討論により議論を深めればと思います。学生相談に関わる方はもちろん、教育現場で臨床実践を行っている方の積極的な参加をお待ちしています。

#### ■話題提供①「学生相談における連携・協働に精神分析的視点を導入することの意義」

今江秀和(広島市立大学保健管理室、KIPP精神分析協会)

学生相談は、学内の相談室において、学生を対象とする相談活動である。相談期間は入学から卒業までと限定され、料金は無料である。相談室が学内にあるため、カウンセラーと来談学生が相談室外で出会うこともある。学生は基本的に毎年進級し、学年ごとに異なった課題に直面していくことになる。また学生相談は、大学という教育機関の中で展開される活動であるため、カウンセラーは発達や心の健康への援助だけでなく、学生生活全般への援助も行うことになり、そこでは個人面接のみでなく、他の組織との連携・協働や関係者への支援も重要な仕事の一つとなる。

このように学生相談は独特の構造を持っており、開業での精神分析的な心理療法のような枠の設定は難しく、相談の枠が揺るがされやすい。特に連携・協働においては、迅速な対応ができるというメリットもあるものの、守秘との葛藤や対応への苦慮といったことも多々生じるように思う。特に精神分析的な心理療法を志向するカウンセラーは、その緩やかな枠に葛藤を感じることも多いかも知れない。しかし、その一方でカウンセラーが精神分析的な視点を持って連携・協働することにより、関係する教職員の学生理解とよりよい関わりに寄与できることがあるように思われる。

本発表では、学生相談における連携・協働において精神分析的な視点を持つことの有用性について検討したい。

キーワード：学生相談、精神分析的視点、連携・協働

#### ■話題提供②「連携・協働の際のカウンセラーの心理的葛藤」

伊藤未青(佛教大学学生相談センター、KIPP精神分析協会)

学生相談における連携・協働の実践は、難しさもあり、面白さもある。連携が必須であったり、必然であったりするケースも多くあるが、誰とどのように連携・協働するかという判断や工夫は、基本的にはカウンセラーに委ねられている。その方法論やコツはそれぞれのカウンセラーの持ち味であろうし、それまでの経験やその場での立場によっても大きく違うと思われる。さらに、依拠する理論やこれまでの学びとの関連もあるであろう。連携・協働していく際に、カウンセラーは起こりうる状況を予測し、考え、学生にとってより良い方法を提案すべく様々な葛藤を抱える。

私の発表では、精神分析的な心理療法を実践している立場から、学生相談の構造、つまり緩やかな枠の中で連携・協働する際に引き起こされるカウンセラーの心理的葛藤を掘り下げて検討していく。事例を元に、誰とどのように連携・協働していける可能性があったであろうか、連携・協働をすること、しないことを選択した時のカウンセラーの葛藤について、「なぜそうしたのか？」という視点も含め検討したいと思う。

キーワード：学生相談の構造、カウンセラーの葛藤、精神分析的な心理療法

■話題提供③「学生相談室の内側と外側：情報共有を巡って」

野原一徳（愛知淑徳大学学生相談室、KIPP 精神分析協会）

学生相談を成り立たせている構造を考えたときに少なくともふたつの理論的な源泉がある。ひとつは、「治療構造論」であり、もうひとつは「コミュニティ・アプローチ」である。アプローチのそれぞれは前提や強調点が異なるために、カウンセラーは日々の臨床を行うにあたってこれらのゆらぎを生きることになる。相談の構造はカウンセラー側だけでなく、学生側の相談への参加の仕方によっても変化するだろうし、加えて大学というコミュニティにおける学生相談室の位置づけや理解にも影響を受けるだろう。

このように、カウンセラーは様々な視点が交錯するなかで何が援助的かを考えていくことになるが、いずれにしても、学生相談室で臨床を実践する際には、面接室の内側だけでなく、面接室の内側に影響を与える外側についても考える必要がある。

構造の複雑さを理解するため私の発表は、学生相談の面接構造の内側と外側の境界面に起こってくることとしての情報の共有を巡る問題を扱う。発表の構成は、最初に文献を用いながら問題を整理した後、私がこれまでに出会った事例を提示し、そこから考察をする。

キーワード：守秘、連携、相互的な構築性

## 「精神分析的治療過程を考える ―それぞれの治療者による捉え方―」

司会・話題提供者: 吉沢伸一(ファミリーメンタルクリニックまつたに)

話題提供者: 鳥越淳一(日本橋学館大学)

話題提供者: 上田勝久(京都民医連中央病院太子道診療所)

話題提供者: 浜内彩乃(大阪バイオメディカル専門学校)

指定討論者: 北川清一郎(心理オフィス K)

### ■企画主旨

精神分析の実践での道具は、治療者自身であることは言うまでもない。様々な訓練により獲得される精神分析的思考は、まさに実践する個々の治療者の主観的体験を通して洗練されていく。精神分析フィールドの中には幅広い理論や学派が存在しており、それらは各理論・学派を生み出した先達自らのパーソナリティや時代背景が強く影響している。後進の私たちは、理論が生み出された先達の経験を部分的に追体験するが、決して追従するだけではないだろう。おそらく私たちは個々人で精神分析の実践を主観的に捉えなおし、自らの精神分析的治療過程を展開させているに違いない。このようにパーソナルに学ばれ実践され展開される精神分析的治療過程を、パーソナルに多角的に議論することは意義があるだろう。初学者や訓練途上の治療者がその心身に馴染みかけている分析的实践を、自らの言葉で語りあうことは、治療過程の本質を探究することになる。

### ■「不毛、夢見、分析過程」

上田勝久(京都民医連中央病院太子道診療所)

私は精神分析的な営みは多くの不毛の時間によって構成されるように感じている。この営みには行動療法や認知行動療法のように、リニアに目指すべき明確で詳細な目標物があるわけではない。分析過程に入って最初の1、2年が経過すると、私たちははたしてどこに進もうとしているのかが本当の意味では定かでなくなる。それはあたかも砂漠の荒野を進むかのような道程である。私たちは迷い、惑い、ただ立ち尽くす。

事例検討会やスーパーヴィジョンはそうした道程を生き残ることに貢献している。だが、それらが今行われている営みの到達点を示すことは稀である。

しかし、それでも分析過程はたしかに進展する。最近の私はその進展に寄与するものが“夢見ること”であると強く確信しはじめている。ウィニコットは夢が可能性空間において生成されるとのべた。しからば、分析過程とは不毛の荒野が可能性空間へと変形される過程として記述できるだろう。そして、私はその変形のための要素は分析設定そのものにあらかじめ準備されていると考えている。いわば分析過程は不毛と生産性の坩堝である。

本発表では、こうした過程について、私自身の心理療法体験と私自身が治療者としての機能した通常の臨床素材を提供することで示してみたい。

### ■「『瀕死対象の蘇生過程』としての精神分析的な心理療法 ―行き詰まりの経験から―」

吉沢伸一(ファミリーメンタルクリニックまつたに)

近年私は精神分析的な心理療法の治療過程を「瀕死対象の蘇生過程」と概念化し実践するようになった。この考えの基盤には、被虐待児やパーソナリティ障害患者との行き詰まりの治療経験がある。患者の(倒錯的或いは精神病的な)病理性に加え、私自身の治療者としての negative capability の問題があり、私は瀕死の状態となることを経験し、治療者として死にかけるが蘇生する必要性に幾度も迫られた。「瀕死対象」とはまさに治療者でもあり、投影同一化されたコンテインされずにきた扱い難い患者の瀕死の乳幼児部分でもある。治療過程とは、この「瀕死対象」を患者から受け渡された治療者自身が瀕死の状態(行き詰まり)となり、蘇生すること、つまり「蘇生対象」となり患者にそれを戻す過程であると捉えられる。治療者は死を一度引き受ける必要があるが、実際に死ぬわけにはいかない。訓練等は治療者を生かす(活かす)ためにあり、己の心身を治療に利用する術の修練である。「瀕死対象」から「蘇生対象」への移行過程では、心的平衡が維持されるままの治療過程で「異物」が生成され思索され変形される必要がある。当日は、臨床素材を提示し「瀕死対象の蘇生過程」について論じ、この視点を保持することが困難な治療をやり通す指針となることを提示する。

キーワード: 瀕死対象、蘇生対象、蘇生過程

## ■「臨床プロセスを振り返る」

浜内彩乃（大阪バイオメディカル専門学校）

私は現在、大阪の専門学校で講師をしている。その前までは、医療・教育・福祉の現場にいた。といっても、大学院を修了し現場に出てまだ5年しか経っていない。臨床家としては、まだまだ初心者だといっても良い。そうした初心者臨床家の視点からすると、現場で臨床を行っていた時、教科書に書かれていたり学会で発表されているようなプロセス過程に出会ったことは、ほとんどない。1回1回の面接に必死で、面接が終わった後は、本当に先ほどの対応で良かったのかと苦悶する。転移の動きや治療経過の流れなどに、その時には気づく余裕もない。「好転しているのだろうか？」「このままで良いのだろうか？」と悩む。そして先輩や先生方のようなプロセスを辿れない自分は、なんて未熟なんだろうと落ち込む。

しかし、どんな人間関係であっても、そこには相互の力動が働いており、それは日々動いているため、プロセスがないなんてことは起こりえない。人と人が出会い、会話をすれば、そこにプロセスは自然とついてくる。当然、臨床場面においても例外ではない。例え、行き詰っていたとしても、行き詰るといふプロセスが起こっている。そのプロセスの真ただ中にいる時には気づかないものが、一歩ひいて眺めてみたり、振り返ってみると見えてくることがある。

臨床現場を離れて数か月。そんな今だから見えてきたプロセスについて考察することを試みる。  
キーワード：初心者、臨床現場、振り返り

## ■「SWAP-200 による精神分析治療過程の実証研究」

鳥越淳一（日本橋学館大学）

精神分析には科学的妥当性がないとの批判があるが、精神分析の効果研究やプロセス研究は過去幾度なく試みられている。しかし、そうした実証研究に関する議論は精神分析のコミュニティ内ですら、それほど多く聞かれない。実際、精神分析の実証研究には批判的な意見も多く、それらは概ね「不可能」（数量データにすることで歪曲化や矮小化が生じるため、分析的に意味のある研究はできないという批判）、「不必要」（精神分析は精神生活の重要な側面を観察できる唯一無二の方法であり、分析理論を修正できるのは精神分析だけである、他の検証は不必要という批判）、「無関係」（精神分析は解釈学の学問であり、実証的研究方法は適用できないし、的外れであるという批判）といったものがあるようだ。結果、分析治療や分析理論の妥当性は所属する学派や訓練分析家やスーパーヴァイザーとの同一化によって担保される傾向があり、閉鎖的・循環的な研究になりがちである（たとえば、著名な分析家の言葉を引用することで妥当性が主張されるなど）。本発表では、SWAP-200 というパーソナリティ障害の精神力動的なアセスメントツールを紹介し、実証研究によって、どのように事例の固有性を損なわず、精神分析治療過程の妥当性を検討し、臨床の知を深められるのか、その一つの可能性を呈示する。

キーワード：実証研究、SWAP-200、治療過程の妥当性

## 「学校の危機と精神分析」

司 会:堀内 毅(猿島厚生病院)  
演 者:植木田潤(国立大学法人 宮城教育大学)  
演 者:上田順一(大倉山子ども心理相談室)  
演 者:人見健太郎(みとカウンセリングルームどんぐり)  
指定討論:飛谷 渉(大阪教育大学保健センター)

### ■企画趣旨

学校教育現場において精神分析的であることは、関与する因子が多くなる分、チャレンジングな面も持ち合わせている。言い換えれば、治療構造が曖昧な場面に曝されながら、起きている事態を吟味し、思索し、整理することが求められているのである。学校教育現場は嵐のように様々な出来事が起きる場所であるが、そこへの関わりや介入に際して「精神分析的であること」が支えになることを私たちは実感している。今回でこの企画は 3 回目となるが、過去 2 年間の議論を発展させる目的で、今年度は「学校の危機」をテーマに据えた。学校教育現場が危機的な状況になれば、関わる者は全員、ますます思索することが困難な状況になる。危機的な状況における私たちの工夫を提示し、どのような視点を持ち合わせるのが有用なのか、フロアとの討論も含めて議論を深めたい。

### ■『「学校の危機」をいかに咀嚼し翻訳しうるのか』

植木田潤 (国立大学法人 宮城教育大学)

学校の「危機」という言葉は、マスメディアに取り上げられるような事件や事故をすぐさま思い浮かべさせるが、これはいわば「外傷的な危機」状態である。一方、主に発達障害のある児童生徒を中心とした、周囲の理解不能な言動を振り撒く存在が教職員や同級生にもたらす思考停止状態や組織的防衛機制の活性化は、「構造的な危機」状態といえるものかも知れない。外傷的な危機に対しては学校組織の復元力が働き、元の状態へ回帰しようとするだろう。しかし、構造的な危機によってもたらされるものは、新たな価値観や枠組みの創出を含んでおり、ある意味では、児童生徒と教職員を包摂している学校組織という場の成長発達に伴う苦痛や苦悩であるとも考えられ、危機と成長は表裏一体である。

現在、特別支援教育から「インクルーシブ教育システムの構築」という新たな発達課題に向き合う学校現場で、われわれ精神分析的なオリエンテーションをもった支援者は、如何にして子どもたちと教職員等が織りなし、時には複雑に絡み合った情緒的な関係性を紐解き、成長発達につなげることができるのだろうか。観察-咀嚼-翻訳することの一連のプロセスを精神分析的な態度で維持し続けることは組織的な共感力を拡充し、情緒的に二次元的だった構造を三次元的な構造へと高めることに繋がる。学校という場が異質な対象をも包含することが可能となる立体的な構造体へ成長する過程について考えてみたい。

キーワード：構造的な危機、コンサルテーション、組織的共感力の拡充

### ■「学校コミュニティの危機への支援の視点 - 見張りから見守りへ」

上田順一 (大倉山子ども心理相談室)

学校コミュニティの危機は、出来事の内容とそのインパクトによるが、いずれにせよ児童・生徒が直接的にその危機に晒されるばかりでなく、児童・生徒を抱える器である学校そのものが危機に直面することでもある。ひとたび危機に晒されると学校は、児童・生徒を抱える機能がさまざま水準で低下する。最近の学校コミュニティの危機への支援は、超短期的な直接支援としては、「学校コミュニティへの緊急支援の手引き」が作成されたり、「学校 CRT」がほぼ標準化されたりと枠組みが定式化しつつある。しかしながら危機的な出来事による混乱が過ぎ去った後の中長期的な支援は、通常の SC 活動に委ねられている状況で、「誰が、何を、どこまですればいいのか」など、今後の研究の課題を残していると言ってもいいだろう。本発表では学校コミュニティの危機について、超短期的な直接支援とそれに続く中長期的な支援を通して、精神分析的観点をどのように利用できるか検討してみたい。本発表での精神分析的観点は「観察と洞察」であり、学校コミュニティの危機への支援の視点が、超短期的には抱える機能をこれ以上低下させないための「見張り」から、中長期的には抱える機能の自立、主体性の進展を「見守り」へと変化していくプロセスについて、ビネットをもとに考察したい。

キーワード：緊急支援、授業参観、乳幼児観察

■「価値観の崩壊と立て直しで揺れる学校現場への介入ー東日本大震災における被災者の受け入れー」  
人見健太郎（みとカウンセリングルームどんぐり）

未曾有の大災害である東日本大震災から3年以上が経過した。隠れた被災地である茨城県は、被害の大きかった東北3県とは異なり、「自給自足」での立て直しが要求される環境にあった。3月11日以降、約1ヶ月間、学校は生徒の受け入れができない状況となり、教員もSCも余震に怯え、自身の生活を守りながらの日々で疲労困憊の状況に陥った。紛れもなく一種の躁状態に陥った反動が翌月からの新年度には色濃く見られた。とりわけ福島第一原発を巡る情報の錯綜は、隣の県での出来事でもあったため、他人事ではいられない状況であった。一方、人道的措置で、受験なしで福島県の生徒の受け入れを高校は行ったが、揺れる福島県の生徒の話の聴くことは、援助者にとって簡単なことではなかった。私たちが「安全だ」と危険性を否認していた原子力発電所の問題は、鋭く現実を突きつけ、万能感を崩したのである。学校も危機であり、その構成員も危機的な状況での援助活動は、人道的配慮という名の限界との闘いの要素も含まれていた。その時期を今一度振り返り、私たちは何ができたのか、ビネットも提示して考察したい。

キーワード：東日本大震災、万能感の崩壊、人道的配慮と援助活動

■指定討論「学校の危機」

飛谷 渉（大阪教育大学保健センター）

学校の危機に際しては、人見氏が指摘するとおり、安全神話が崩れ万能感は崩壊する。学校集団は容易に妄想的状態に陥り、成長促進機能を失う。こうして学校集団では混乱や痛みを投影が活発となる。その投影的機能は、学校のコンテナーとしての統合的機能に相反することとなり、「憎悪を広め」、「絶望をまき散らし」、「迫害不安を放散し」、「嘘と混乱を生む」などの状況を招くことになりやすい。学校は機能停止状態に陥る。

その状況に関わる臨床家にとって重要になるのは、精神分析的観察であり、外傷状況に身を置き投影を受け取ることで生じる逆転移の体験をそのものとして把握することである。困難な投影的機能をそれぞれのメンバーがどのような形で担っているのかを同定し、統合的機能によってコンテインして行くということが、危機状況での中心的課題となるだろう。上田氏が指摘するように、そこで臨床家の内部で生じる態度は「見張り」から「見守り」への体験的变化のプロセスであり、さらにそれは植木田氏も指摘するとおりグループ構造の情緒的次元性の成長である。それは臨床家内部における逆転移の観察的認識性とその情動的体験性の変化と同期する。これはコンテインメントにおける妄想分裂のモードから、抑うつモードへの変化を意味する。学校集団の危機が、臨床家の逆転移を通じて理解され、真にコンテインされることにつながる可能性が生じることになる。

指定討論者という立場から、三氏の発表を集団状況におけるトラウマのコンテインメントという観点から検討し、議論の活性化に努めたい。

キーワード：コンテナー・コンテインド・モデル、精神分析的観察、観察における逆転移

## 「被災地コミュニティに継続的な支援をするためのつながり形成に関する精神分析的考察」

司 会:長川歩美(A&C 中之島心理オフィス)  
話題提供者:辻 啓之(京都精神分析心理療法研究所)  
話題提供者:野原一徳(愛知淑徳大学学生相談室)  
話題提供者:今井たよか(あるく相談室京都)  
指定討論者:川畑直人(京都文教大学、京都精神分析心理療法研究所)

### ■企画趣旨「災害において精神分析は役に立つのか」

京都精神分析心理療法研究所を母体とする KIPP 災害対策委員会「花届け人・京都」は、2011 年 7 月から東日本大震災及び福島第一原発事故の被災地コミュニティへの心理支援活動を行ってきました。そこには平時とは異なる心の動きがあり、予想していなかったいくつもの体験に遭遇しました。

今回は活動を始めた当初の被災地コミュニティとのつながり形成をテーマとし、第 2 回派遣活動を行った辻啓之、第 3 回派遣活動を行った野原一徳、第 5 回派遣活動を行った今井たよかがそれぞれの体験とそれに基づく考察を話題提供し、第 1 回及び第 4 回派遣活動を行った川畑直人が自身の体験を踏まえて指定討論した上、フロアも交えてディスカッションすることによって、精神分析的視点を用いた被災地コミュニティへの心理支援活動についての理解を深めたいと思います。

### ■話題提供

辻 啓之(京都精神分析心理療法研究所)

被災という事態は、それによって多くのものを奪われた被災者に避けがたい無力感を味わわせる。強い無力感や希望や楽しみや喜びを感じることを妨げ、うつ状態やアルコール等への依存状態に陥れやすい。

また、被災は怒りも生じさせる。多くの人が自らの生活環境の激変に伴う過大なストレスの中でいらだちやすくなる。怒りを表出するかどうかはパーソナリティと深く関係しているため、誰もが怒りを露わにしている訳ではないが、子どもや行政関係者といった怒りをぶつけても反撃されにくい相手に怒りが向けられるエピソードはよく耳にする。

このように被災時においては平時と比べて無力感や怒りが過剰になるため、それらの感情に動かされることによる行動化がしばしば生じ、その行動がさらなる無力感や怒りを生み、不安や混乱を強めていくという悪循環に陥りやすい。

そして、被災地域に乗り込む以上、支援者もまたその枠外にいることはできず、無力感や怒りに翻弄され、悪循環の渦中に巻き込まれる。そのような状況を生き抜くために、精神分析の視点は役に立つのだろうか。第二回派遣活動での体験を事例として提示しながら検討したい。

キーワード：無力感、怒り、行動化

### ■話題提供

野原一徳(愛知淑徳大学学生相談室)

今回の活動をはじめるとあたり、継続的に被災地域の中に入り支援するという方向性は共有されていたが、前もって「花届け人・京都」から具体的な援助の方法論を持ち込むことはしなかった。それは被災地の個別的な生活により密着したかたちでのかかわりを模索し、計画を立てていくことがまず目指されたからである。

初期の活動から生まれた理解は、震災が生活の激変を余儀なくされる未曾有の大惨事であり、情動的に圧倒される、先の読めない経験であるということだった。被災地においては、このような目の前の現実に対処するための心理的機制として、現代対人関係/関係精神分析において重視されている意味での解離が含まれると考えられた。解離という用語は従来から PTSD など Janet の影響を受けた理論的文脈において用いられてきたが、共通点も多いものの、ここでの用法はより無意識的な防衛操作として積極的に使われることを想定している。また、解離を対人関係の場で生じるより普遍的な機制として考えるとところにも特徴がある(Howel, 2005; Stern, 2009)。活動を通じて、ボランティアを行おうとする自分たちの存在自体が不安をかきたてるため、被災地とつながりを作ることは難しいものだったが、その情動的意味を理解することは後の継続的な支援に寄与したと考えられた。

キーワード：解離、被災地支援、ボランティア

## ■話題提供

今井たよか（あるく相談室京都）

物資や医療など目に見える支援に比べて心理支援がどう役立つのか、特にそれが、自己を通して人と関わることが基本的な手段である精神分析的臨床に方向づけられている場合に、本当にどう役立つのかという怖れは、大規模な災害支援では特に顕わになるように思われる。私は、何をするためにその場に足を踏み入れるのだろうか。支援に関与することを決意する過程から、自己を内省する作業は始まっている。その怖れは、被災地に行って、現地の人々と出会い、交流し、役に立ちたいという欲望と表裏をなしている。

今回経験した支援活動は、「支援者の組織化」「料理教室」「ストレスマネジメント」などの目に見える形を作りながら進められた。それらは心理療法における時間や場所の設定のように、被災地の人々と私たちが安全に近づくための構造として役立つように思われる。精神分析的臨床の見地からは、それらの形を準拠枠として、そこで何が起こるかに関心を持ち続けること、現地の人々と本当の意味で出会うことの難しさや、自分自身の怖れから目を逸らさずに、その場に行き続けることが大切のように思われる。そのような支援者の内的なつながりの感覚が、現地の人々の相互交流や、現地の人々が自分自身の感情に触れることに少しでも役立つことに、災害心理支援の希望があると考えられる。

キーワード：災害心理支援における出会い、希望、怖れ

## ■指定討論

川畑直人（京都文教大学、京都精神分析心理療法研究所）

広域災害時の心理支援の在り方について、システム心理力動的な観点から指定討論することにする。

キーワード：広域災害、心理支援、システム心理力動



## ◆個人発表

個人発表1 (2 演題) 2014 年 12 月 6 日(土) 10:00~12:30 (敬学館 264 号室)

### 「精神分析(的心理)療法における「真実」の発見について;土居の準拠枠から」

発表者:清川雅充(柏崎厚生病院)

土居は、精神分析(的心理)療法における「真実」について、「発症の直接の契機」「如何にしてその病気が生じたかと言う患者の生活の秘密」と表現している(Wahrheit;英語では authenticity)。これは「直視するにはとてもつらすぎる事」であるが、これは中野の「誘因」(Veranlassung;英語では precipitating cause)にも相当する。

そして、真実に立ち向かい、真実を照らし出す際の拠り所、態度が「真実性」と考えられるが、これは土居の精神科医として患者を指導する際の拠り所、態度である。さらに土居はフロイトの Wahrhaftigkeit(真実性)について、治療者としての単なる職業倫理を超えた、治療者個人の人格的在り方を意味している事は明らかであると論じ、これは土居においても同様だと考えられる。

吉松(2010)は「真実(性)」について「患者も治療者自身も事実に対してごまかさないうで真実を追っていく姿勢」と表現し、さらに筆者は「真実性」について「患者の切実かつ深い思いに触れて患者の心の事実を真剣に知ろうとする。その際、語られていく事に真摯かつ共感的に耳を傾け、ムンテラ的な誤魔化しをせず、時々質問や解釈をする」のように独自に考えている。そしてこれを患者を指導する際の拠り所、態度としている。

今回演者は、精神分析(的心理)療法における「真実」についての概念を概観し、さらに症例を通じても見てみたい。

キーワード:真実、精神分析、真実性

### 「メルツァー『こころの性愛状態』に見られる社会思想についての一考察

#### ——結合対象概念によるエディプス構造概念の深化の含み」

発表者:平井正三(御池心理療法センター、NPO 法人子どもの心理療法支援会)

本発表では、ドナルド・メルツァーの著作『こころの性愛状態』にみられる社会思想、政治思想について検討していく。『こころの性愛状態』において、メルツァーは、心の成長を、超自我から自我理想へと向かう動きとして、結合対象とそれへの破壊的動きとの相克を焦点に示している。彼はこの臨床理論を、社会の中で広がり、社会制度を動かしていく思想を吟味するために用いることができることを示唆している。また、彼は、人間の心の本性であるエディプス構造は、常に届きがたい「理想」を追い求め、現世代を次の世代が改革し続けるという「永続革命」を促すと論じ、人は常に社会の改革を求め続け、新しい社会思想を生みだしていくと示唆し、社会思想そのものの生成のメカニズムを示している。

本発表では、このメルツァーの見解を、エディプス・コンプレックスと超自我(自我理想)形成を主軸にしたフロイトの社会理論、そしてビオンの集団心理理論と比較することで、さらに最近の霊長類の動物行動学的研究の知見を参照して、その含みを明らかにしていきたい。特に、結合対象理論によるエディプス構造概念の変容が、フロイト理論のパターナリスティックな色調から、パートナーシップ思想への展開という含みを持つこと、そして「よい内的対象の庇護の下」という概念が言論の自由や民主主義思想の精神分析的基盤であることを示したい。

キーワード:結合対象、社会思想、エディプス構造

個人発表2(2演題) 2014年12月7日(日)10:00~12:30(敬学館264号室)  
「フロイトの冥界めぐり——『夢解釈』の二重の銘をめぐる一考察——」

発表者: 上尾真道(立命館大学衣笠総合研究機構)

「天上の神々を説き伏せられぬのなら、冥界を動かさん」。周知のごとく、時代を画するフロイトの名著『夢解釈』の表紙に掲げられた銘である。ヴェルギリウスの『アエネーイス』から引かれた、復讐と戦争を暗示するこの一節は、『夢解釈』という著作において二重の示唆の機能を果たしている。ひとつには内容の水準において、「抑圧」理論の内容をほのめかすものとして。しかし他方では、この著作全体が当時の精神医療のパラダイムにつけつけた異議と挑戦をほのめかすものとして。では、この異議と挑戦とはいかなるものであるのか。本発表はこの点について、フロイトの冥界のモチーフの意味するところを辿りながら、明らかにする試みである。

そのために、まずは「抑圧 Verdrängung」概念の『夢解釈』における扱われ方を検討する。すでにそれ以前から病因論的に重要な役目を担っていたこの概念は、『夢解釈』においては「禁圧 Unterdrückung」概念と曖昧に結び合っている。しかし、ここには実際、ふたつの異なる力の作用様態を見るべきであろう。発表では、それを垂直性および表面性のふたつとして整理することを提案したい。さらに、そうした見方から、フロイトにおける冥界あるいは深層というモチーフが、当時において極めて新しい、表面性に立脚した力とプロセスのモデルを提示していることを確認し、その臨床実践的含意についても検討したい。

キーワード: 『夢解釈』、抑圧、冥界

「欲動論から対象関係論へ——アブラハムにおける躁うつ病論の展開——」

発表者: 藤井あゆみ(京都大学大学院人間・環境学研究科(日本学術振興会特別研究員))

フロイトの高弟カール・アブラハムは精神分析における躁うつ病研究の第一人者として知られる。1917年に公表されたフロイトのうつ病論「喪とメランコリー」に先立つこと5年、アブラハムはそれまでフロイトが精神分析療法の埒外に置いていた躁うつ病治療を扱った論文を著した。「躁うつ病およびその類似状態の精神分析的研究と治療のための端緒」(1912 [1911])である。

さらに彼はフロイトが明示しなかった対象関係の問題にも切り込んでいった。この問題を取り上げたのは、先の論稿のおよそ10年後に上梓された「精神障害の精神分析に基づくリビド発達史試論」(1924)である。ここでは、うつ病患者とその愛の対象との関係性が詳述され、対象愛の発達が図式化されている。また、メランコリーがヒステリーの水準に引き上げられた症例も報告されており、この病が精神病から神経症へ移行したということに力点が置かれている。

このような精神病へのアプローチと対象関係の考察は、後のクラインの理論に引き継がれていく。本発表が目指すのは、アブラハムの躁うつ病論の展開が、フロイトの欲動論からクラインの対象関係論への移行の前史として学説史的意義を持つことを明らかにすることである。

キーワード: カール・アブラハム、躁うつ病